
ある男の二十二年

野狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある男の二十二年

【Nコード】

N4228I

【作者名】

野狐

【あらすじ】

病院のベッドに伏した百瀬晋太郎は、二十二年前、妻と幼い息子を亡くして以来、生きることには何の意味も見いだせず、自分が生きることが家族への償いになると信じてこれまで生きてきたが、それすらも感じなくなっていた。ただ生かされているだけなのだ。

ある日胸が苦しくなった晋太郎は死を覚悟するが・・・

切ない記憶となった過去と鮮やかに蘇る過去。還らぬ記憶を叩く、恐怖と希望と癒しを描く作品。

その一

「私の一生を捧げるべき仕事は終わった」

病院のベッドに横たわった百瀬晋太郎は、少しだけ開いた窓から外へ向かって呟いた。誰も聞いているはずもない。私は一人きりで何故生きているのだろうか？くだらない疑問は嫌いじゃあない。病院食は何故あんなに固く感じるのだろうか？時間もきつちりしすぎじゃあないか？ご希望通りの時間にお持ちします・・・というのはないか。

「私はこのまま消えていくんだ」

窓からは暖かな風が吹き込んでいて、高いところまで昇った太陽の光が僅かに差し込んでいた。窓に掛かった白いレースのカーテンが揺れる度に、憎たらしいほど爽やかに青い空が見える。聞くところによると空には色がないのだとか。空は透明で、太陽からの光が、大気中の酸素、窒素、水蒸気などの分子や、光の波長よりも小さい微粒子にぶつかり散乱すると、青のように波長の短い光が強く散乱され青く見えるのだそうだ。夕方は太陽光が斜めに通過するので、大気の厚みが増し、赤や黄などの光が散乱するのだと。何を馬鹿なことを。晋太郎は思った。小さな子供たちに教えるとしたら高等教育じゃあないか。だが、もう私に、そんな機会もありはしないな。「空の中に消えてしまえば、誰も、何も知らないところで」晋太郎は心の中でぼつりと漏らした。

五十四歳の晋太郎はいつからこうしてベッドに伏しているのか自分で分からなかった。ある日突然胸が苦しくなり、世界がコーヒーに浮かべたミルクのように回り出すと、自分は死ぬんだと覚悟をした。嫌な気分ではなかった。死が恐ろしいと感じていたのは三十

二のときまでで、それ以来は怖いと思ったことはなかった。だから苦しみ倒れたとき、自分はおのまま死んでいくのだと、こうして消えていくのだと思ったのだ。だが目を覚ました晋太郎は病院のベッドに寝かされており、看護師の男性が窓を開けているところだった。そのときの空も青く澄んでいた。

病室は晋太郎一人ではなく、同じような病気の入院患者と二人での部屋だったが、大抵相手は老人で、長いこと近所付き合いをすることは出来なかった。つまりそれほど早くに亡くなってしまおうということだ。ましてや好きな野球チームを言い合ったり、孫の自慢話を聞く仲になったものなどない。ただ一人、将棋が好きだ、と言った老人といつか勝負しようという話を付けたが、ついこの間亡くなった。晋太郎は亡くなったことを知らなかった。亡くなる数時間前には、一人着替えて散歩に出かけていったからだ。老人が見つかったのは太陽が一番高いところに昇る午後二時のこと、屋上に植えられたプラントの隅で、朱色と黄色のチューリップの花壇に頭を突っ込んだ老人はすでに死んでいたそうだ。というわけで今も隣のベッドは開いている。

楽しみはなかったが（ほとんど毎日同じ時間の繰り返し、退屈すぎてノイローゼになるといのは案外本気の話だ、と晋太郎は思った）、晋太郎にとつてのあえての楽しみというのなら、いつ来るかも知れない小説を読むことだった。この小説は担当の看護師の田中浩二が教えてくれたもので、本当にいつ続きが読めるのか分からない、そんな小説だった。一回につき大体原稿用紙二十枚くらいでまとめられている小説を田中が印刷して持ってくる。インターネットで配布されているものらしく、登録者に突然に送られてくるのだと田中は言った。それをA4の用紙に印刷して晋太郎に渡しているのだ。次の原稿まで一週間空くこともあれば、次の日に配られることもあった。つまりは作者の気まぐれということなのだ。はたして次があるのかどうかすら分からない。

「全く持って身勝手だ」晋太郎はそんな風に愚痴った。「続きを見

たくなるのが性だな」

「まあ色々忙しいんでしょう」田中はなだめるように言った。

小説の内容は小人と一人の男の話で、ピグミーと呼ばれる小人族の家族と男との友情の話だった。男は乱暴な性格だが、博識で勇敢なピグミーの父親スーノに色々な話を聞いたり、母親のフローロと息子のベントを大切にするスーノの姿を見て改心していくという話だ。晋太郎はスーノの話す冒険譚が面白いと思った。ネズミにまたがって巨大な山猫から逃げたり、鷹の卵をさらって、それを羽化させて育てた話、自分たちのような小人族は世界に何億といるとい話、不思議だが優しく暖かい童話のような話だと晋太郎は思った。そして息子にもこんな話を聞かせてやりたかったと胸を熱くした。「ハラハラしてるか？んっ？そこで堪えるのがコツだ。その我慢こそが次に起こることを最高に盛り上げてくれるんだ。我慢しきれず手を出したらそこまでさ。最高潮とはならないんだな。最高潮を記せ！残せ！」

小説の中でスーノは男に言った。ソファアの端に座り、木の実の密酒を小さな木製のカップに入れて飲みながら言ったのだ。

ムーミンのパパも同じことを言っていたな。彼は最高の父親だ。

そう思った晋太郎には目を閉じて苦笑いを浮かべるしかない。

晋太郎は、生きることにもう目標がない、と田中に漏らしており、それを聞いた田中はこの気まぐれ小説を薦めたのだ。晋太郎は、お節介なやつだ、となじりながらも田中に感謝してみせた。しかしそれだけで、本当の気持ちは変わらず、死ぬことに何の恐怖もなかったし、むしろ未来の暗さに恐れていた。

そんな晋太郎は実際よりも遙かに年老いて見えた。白髪交じりの頭はボサボサで、痩せこけた目下の窪み、空ろな目、晋太郎は一見したところでは六十から七十くらいに見えた。食事はあまりとらず、散歩に出ることもない晋太郎は音楽すらも聴かない。煙草も酒も三十二のときに止めた。小説が来ない内はただ窓から外の景色と天井を見る毎日ではないのだ。

「最後にはうつってつけの場所だ」隣の開いたベッドを眺めながら晋太郎は言った。

シーツが綺麗に張り替えてあり、そこにあるはずの死臭が上手くカモフラージュされている。ベッドの頭の所にある名前の入っていないプレートは、次から次へと新しいパンが焼かれ、プレートに「焼きたて」とか「人気商品」などと張り替えられるパン屋の姿を晋太郎に連想させた。

「ええ、元気になってここを出なくてはね」田中は答えた。それから隣のベッドに腰掛けて言った。「病院なんか入ってちゃ駄目ですよ。本当にこのまま最後までいるなんて思いませんよ。だって百瀬さんまだ五十四なんですから」

晋太郎は何も言わず天井を見ていたが、はつとすると田中に向き直り、半ば強い調子で言った。「そこから降りろ！さあ座るな！」

田中はびくりと体を強ばらせると、親に怒られた子供のように素早い動きで立ち上がった（でなければ猫のようだ）。

「そこは死んでいく人間たちの死臭がある。お前はまだ若いんだし、そんなものまで背中に付きまとわせる必要なんてない」晋太郎はそう言つと小さく首を振り、自分のベッドの真白なシーツをじつと見た。

「その死臭っていうのは？」田中は言った。少し笑っている。

「死臭だと？」

「そう、死臭、きつと見た目にもおかしな姿をして脅かそうとするんでしょうね」

「ふん、好きにしる」

声を出して田中は笑った。「おかしいっただらないですよ。きつとその死臭つてやつは行き場所を亡くしてウロウロしているんでしょうが、残念ながら病院は死ぬところなくて治すところですからね。

それに入る所じゃなく出るところですよ。死臭君は、なんて言うか、場違いなんですよ」田中はポンポンと綺麗に敷かれたシーツを叩いた。「それに僕は二十九歳、百瀬さんは五十四歳なんだから・・・」

ピタリと続きを言うのを止め、何か目に見えないものに気付いたように止まった。

「まだやることが山ほどあって、それをするために早く病院から出ないと駄目だと?」シーツに目を落としたまま、年老いた五十四歳は言った。

「そうですね。それをやらなきゃ駄目ですよ」若い看護師は言った。

「どこかに人生目標キットみたいな商品ないですかね。国がそういうのを作ったらいいんですよ。生きるっていうのが空白みたいなことにならないように、幾つもサンプルがあつてそれを選んででも目標を持てたらっていう、変なやつがあつたら面白いなあ」

「お前の人生は目標と希望に満ちあふれ、美しい花が咲き誇っていると、そういうことだな」晋太郎は言った。

「えっ?」

「生きていて何になる?」

「何につて・・・楽しいことはありませんよ、きっと」田中は無理矢理答えた。

「楽しいことね・・・私は家族を殺した」晋太郎は震えながら言った。「直接的にはないにしろ、いや、同じことだ。殺したも同然だ」

「・・・きつと亡くなった皆さんはそんな風に思っていないですよ」田中が首を振る。

「どうして?」

「どうしてつて・・・それは、家族だから・・・」

晋太郎は吐き出すように笑い飛ばして田中を睨みつけた。田中はその窪んだ奇妙な瞳から逃れるように視線をそらした。

「もう一度言おう。お前の未来の中には希望やら夢やらが金銀財宝のように詰まっているんだよ」慎太郎は言い、それから外に目を向け続けた。「私はそれらを亡くしてしまっただね。夢を持たないものは屍と同じだ。私はあんたらの力でこうやって生きながらえているだけだ。屍なんだ。夢を亡くして、家族を亡くして」

田中は何も答えることが出来ず、哀れな目の前の病人を見つめた。どうすることが自分にとっての一番の方法なのか、田中には分からなかった。

「私が息子と遊園地に行く約束をしたのは息子が死ぬ二ヶ月も前のことだ。しかも予定を引き延ばしたのは二回目だった。だが息子は晋輔は一言も文句を言わなかった。文句を言うような子ではなかったんだ。実際自分の息子にしては出来すぎだと、そう思うこともあった。それは妻のお陰さ。可哀想に、息子は遊園地に、あんなに楽しい場所に一度も行くことなくこの世を去ったんだ。七歳の誕生日はあと三ヶ月後に迫っていた」晋太郎は田中の目を見た。それから何も言わずじつと見続け、ぽつんと言った。「まだ六歳だった」

目をぱちくりさせながら田中は言うべき言葉を模索しているようだった。

強い風が吹いてシーツが勢いよく舞い上がった。二人はその様子を見て、その向こうに見える空を眺めた。二人は沈黙した。

「僕には何も言えません」田中が始めた。

「いや、結構。これは私の責任なんだから、すまないな」

「家族を愛しているんですね」

「当たり前だ。家族は私にとっての全てだった。私の生涯を賭しての仕事は家族を守ること・・・だった」

「きつと幸せでしたよ」田中にはこりと笑った。「奥さんも、息子さんも」

「言わんでくれ、そんな風には、逆に辛くなる。誰が何と言おうと、殺したのは、私だ。私は家族を愛しているのに・・・だが、もういないんだ」晋太郎は静かに言った。

田中が去ったあと、晋太郎はいつもと変わらない様子でベッドに入っていた。最近のベッドはボタン一つでベッドが持ち上がる。何と親切なことか、と晋太郎は思う。田中は病院が出て行く場所だと言ったが、案外入りたがっている人間は多いものだ。晋太郎は体を半分起こして、田中の持つてきた小説の続きを読んだ。

「ハラハラしたことは我慢して溜めておいて・・・」

晋太郎は同じ文章を何度か目で追って、それから繰り返した。

晋太郎の家族、妻の里菜と息子の晋輔が死んだのは晋太郎が三十二歳のときで、自動車事故により二人は死んだ。もうすぐそこまで冬がやってきていて、前座の秋がステージ上で舞っているのを、舞台袖で主役の冬が眺めている、季節はそんな感じだった。風は冷たくなり日も短くなったそんな日のことで、二人の乗る軽自動車がつラックと正面衝突して二人は即死した、とそう聞いたとき、晋太郎は最初何も考えられなく立ちつくした。そして次に気持ちが悪くなった。警察からの連絡だったが、何を言われたのか理解しようとする胸が気持ち悪くなって吐き出してしまったのだ。何故警察なんだ？病院ではなく・・・つまり、死んだ。家族が死んで初めて泣いたのは、葬式から一週間経って、息子のサッカーボールを蹴ったときだった。

夜になっても晋太郎はベッドから動かなかつた。だが女性の看護師が夕食を丁寧運び込むと、晋太郎はそれをしっかりと食べた。どうしてかは分からないが全て食べた。白米にイカの照り焼き、みそ汁、里芋とゴボウと人参の煮物、野菜サラダ。煮物の味付けが里

菜の味付けと似ていたのかもしれない。いや、そうではなかったのかも知れない。

雲が出ていて少し肌寒い夜だった。どこか、すぐ側で鳥が鳴いているが、別段奇妙ではなかった。それよりも街灯が柔らかく当たりを照らしているのが奇妙に思えた。夜の闇の中に色々な色が溶け合っただけに見える。抽象画の巨匠パウル・クレーはバツハやモーツァルトを尊敬し、クラシック音楽を色彩に変換して表したらしいが、ならば逆にこの入り交じった夜の色もまた、何らかの感情を意味しているのだろう。沈んだ感情を沈没船のように浮上させるにはとてもいい夜だ。

消灯後も座ったままで晋太郎は昔のことを思い起こした。

「僕はいいんだ、さあお父さん、頑張つてね」

耳にした最後の息子の言葉だ。息子とハイタッチをし、そして玄関口で優しい笑みで手を振る妻の姿が最後の家族の姿だった。自分が家族に向けてそのとき何と言ったのかは覚えていない。

その日、突然の仕事が入った。短期派遣の幹旋会社で働いていた晋太郎は朝早くから電話を受けて飛び起きた。聞くところによると派遣していたスタッフが職場に行っていないのだとか。派遣先の主任は怒り狂っていて「今すぐに新しいスタッフをよこせ」と「今回の依頼料は払わない」の二言しか言わない。晋太郎はすぐに仕事を休んだスタッフに電話を掛けたが相手は出るはずもなく、代わりも見つからなかった。こういうときには担当者が代わりに行かなければならないのが会社の決まりだったので晋太郎は行くことにしたのだ。スーツに着替えるまで、その日息子と遊園地に行くことを忘れていた。洗面所の鏡に映った自分の姿を見て、あっ、と晋太郎は声を漏らしたが、結局は晋太郎は仕事へ行った。どんな形であれ、それは家族のためなのだ。そう言い聞かせた。

主任に頭を下げた後、スーツのまままで仕事に入った。汗だくになりながらも冷蔵庫の部品の仕分けをした。

「本当は晋輔と遊園地に行くつもりだったのにな、すまん、晋輔」

眩きながら部品に向かつて謝ると、大きく息を吐いた。

事故の連絡が入ったのは昼過ぎのことだ。朝の仕事が終わってスツプが休憩に入る。晋太郎も同じように休憩に入り、主任にもう一度頭を下げながら缶コーヒーを二本買った、その直後のこと・・・病院へ行くと二人はベッドに寝かされていて、映画とかドラマで見たように顔に白い布をかぶせてあった。二人とも胸を強く打ったことによる圧死だと聞いた。トラック事故にしては外傷は少なく、横たわる二人はあまりにも綺麗で、晋太郎は普段通りに話しかけた。そんな自分が何と間抜けな姿か、自身で理解しながらも晋太郎は狂の仕事が終わる時間を妻に伝え、夕飯は一緒に食べられそうだと、そう伝えた。

里菜は三十歳、晋輔は六歳だった。

その後晋太郎は職場を辞めて新しい広告会社へ勤めた。冷蔵庫の仕分けのせいだとは思わなかったが、もうこれ以上は続けられる自信がなかったのだ。家族が死んだ死の記憶が胸の中に絡みついて離れることはなかった。

不公平な話だ。それに惨めで、可笑しくて、失笑さえ誘いかねない人生話ではないかと。

さて、どこまでが自分の責任なのか、家族の死の責任はどこにあるのか、その思いは晋太郎を苦しめる。自分には全てが自分の責任だ、とそう言い聞かせていた。そうすることで自分の金庫の中に一切切をしまっておけるのだ。自分しか鍵は持っていないのだから、確かに重いがそれでも目に見える場所にあるよりはずっとよく、他人に触れられるよりもいいと思った。だがしかし、周りの人間たちは晋太郎の責任ではないと言う。そう言われる度に本当に自分に責任がないのでは、と思うようになり、外へ飛び出した死の記憶が耳元に付きまとうのだ。

喉が渴いて死にそうだ、晋太郎、お前の責任ではなく、家族はお前という人間の外で死んでいったぞ。ペしゃんこになり、カエルのように鳴き、目を縦に見開いて、あっという間に死んじまっ

た

振り払って晋太郎は虚空を睨みつけた。死の記憶はせせら笑いながらのんびりと漂っている。

「行くな！お前はしまわれている！」晋太郎は死の記憶を追いながら吐き出した。すると突然胸が苦しみだした。体中に激痛が走り呼吸がしにくくなる。体が震え、どっと汗が漏れだした。晋太郎は看護師を呼ぶボタンに手を伸ばしたが、咄嗟に押さずに手を引いた。家族の所へ行けるかも知れない、と考えたのだ。死の記憶が窓から外へ出て行き、夜の色の中に新しい色を付ける。

晋太郎は体を無理矢理起こして、窓際へ引きずった。顔が発火したみたいに熱くなり、目からは意図しない涙が流れ出す。喉の奥からは死に瀕した人間の奇妙な叫び声が漏れだしている。窓枠に腕を絡め体を起こし、外を必死に見ると、死の記憶は今や街灯の下のベンチへと至っている。

どこへ行くんだ？お前がいなくなったら俺は責任をとれない、里菜、晋輔、お前たちのところへ行けるのか？そんな、俺は、ただの理想でしかないのか？どこへ行く・・・

晋太郎はその場に音を立てて倒れ、意識が次第に遠ざかり、身体のどこか深いところに鈍いハム音が鳴りだした。それから古いブラウン管のテレビを消したときのようにブウンと音がなって、そして消えた。

*

「百瀬さん、どうしたんですか？」看護師の中畑敬子は言った。彼女は看護学校を卒業して五年目の看護師だったが、まだ学生と見間違えるほどに幼く見えた（実際高校生にさえも見える）。敬子は少し茶けたボブの髪を頭の真後ろで一つに括っていた。先輩看護師の間宮章子は、髪を括るほどじゃない、と言ったが、敬子はこれ以上幼く見えるのが嫌で括っていた（彼女自身目指すべきナーズはドラ

マで見た松下由樹なのだ)。

「昨日の夜倒れていたらしくてね、意識が戻らないままなんだって」と章子。

章子は鏡の中に映る自分を熱心に見やるのを怠らず、しばらくすると頷いて手を洗った(彼女は休日ともなれば大勢で連れ立って飲み屋で愚痴を言いやつたり、合コンを積極的に組んで豹のような目をぎらつかせる、いわゆる“最近の若者は”と言われて逆上するタイプの人間だった)。

「そう、割と元気そうに見えましたけど」

「分からないものよ、泉先生もあまりよくないって言っただけだからね・・・」

「そう、ですか・・・」渋い顔で敬子は同意した。

「それよりさ、百瀬さんの担当って田中君でしょ？」章子は目を輝かせた。

「ええ」

「彼さ、彼女いるのかな・・・ねえ知らない？」

「田中さんは、結婚していますよ。確か」

「何だ、そうなの・・・じゃあいいや」章子は敬子に向き直ると、まるで釈迦が人々を諭すように言った。「私ね、結婚している人には手を出さないの。後々面倒だし・・・それにほら、相手の奥さんのこととかお子さんのことを考えるとね。どんなにお金落ちでも同じよ。その当たりはちゃんとわきまえてるんだから。いちいち男に手を出すような軽い女じゃないわ」

敬子は章子を半ば驚いたような目で見たかったが、悟られないように隠した。それからお付き合いスマイルを章子に送り、頭の中では倒れた百瀬晋太郎のことを考えていた。百瀬は幼い子供と妻を、昔に交通事故で同時に亡くしたのだと田中から聞いていた。息子はもしも生きていれば自分より四つ年上、田中とは同じ年齢なのだろう。

章子と敬子は連れだって百瀬晋太郎の病室へ向かった。医者

に呼ばれており、手伝うためだ。銀色のカートにはモルヒネやらフエインタニルの貼り薬やら点滴の換えやら、その他にもタオルやガーゼなどが乗せられていて、忙しくカチャカチャと音を立てている。「もしかしたら、今から私たち、人が死ぬところに立ち会うのかもね」

突然で、敬子は危うく前に行く章子にぶつかりそうになった。それほどに章子は急停止して言ったのだ。

「私たちの仕事ってさ、ある意味恐ろしいことよ。白衣の天使なんて言われるけれど、誰かが死んだあとにそのシーツをとつかえるのが私たちじゃない。それにそのシーツをクリーニングして、また同じように使って、変な話よね、死ぬ瞬間の人って何を考えるのかしら？ 私なんてこの前ね、三 二号の吉田さんが亡くなる時、もう昔の退屈なほら話を聞かなくて済むんだって、心の中じゃ笑ったのよ。最低じゃない？」

敬子は何も言い返せなかった。それよりもどうして突然そんな話を始めたのかと思うと、何だか悲しくなった。

「吉田さん身寄りがいなくて一人きりだったでしょう？ だから最後に立ち会ったのはごく数人だけ・・・今度もそうよ。百瀬さんも身内が誰もいないんだもの。何だか可哀想ね。一人きりで最後だなんて・・・神様がいれば一人くらい救ってあげても、神様自身罰なんて当たらないでしょうけどね」章子は含み笑いをしてまた先へ進んでいった。

遅れてカートを押す敬子は、章子の、人が死ぬ瞬間をまた見るかも、と言う言葉を心で反芻していた。私は人が死ぬ瞬間が怖い、と敬子は思っている。五年看護師をやってもその瞬間はやはり怖い。親、妻や息子や娘、孫、友人、多くに囲まれて死ねるのは、奇妙な話だが、死ぬことへの幸せな道なのかも知れない。だがもし誰もいなかったなら、だからこそ自分たちが見送ってやらなければいけない。敬子は死の淵に立ち会ったとき、決して涙を見せず、その後で一人トイレで涙を流した。

その三

百瀬晋太郎は目を覚まし、驚いたように跳ね起きた。フルマラソンを走つたみたいに呼吸が乱れて、暑くて死んでしまいそうだ。額に触れるとじつとりと汗が手を濡らし、体には鳥肌が立った。ここはどこだ？百瀬晋太郎は疑心暗鬼な目で周りを見渡した。濃い群青色の闇に遠い記憶の中、見覚えのある風景が浮かんでいる。闇の中に様々なものが白い線で見えてくる。

どうして？

晋太郎は何が何だか分からなかった。

ああ、悪い夢を見ている。

ここは俺の家だ。だがしかし、俺は病院にいたはずなのに？体なんてろくに動かせなかったし、それに俺の癌は治る見込みなんてなかったじゃないか。癌で倒れてからの一年間、一度も病院を出られなかったではないか。

晋太郎は暗がりの中に誰かが眠っているのを察知して、身構えた。おぼろげな人影を一人分、確かにそこに感じる。そして晋太郎は気がついた。顔を布団の中に埋めながら眠る、そんな癖を持つ人間を知っている。晋太郎はそつと布団をめくった。暗がりの中でもよく分かる。自信が愛した人、守れなかった人、会いたかった人、何年も前に死んだ妻の里菜だった。

だがふいに悪い妄想がよぎった。本当に里菜なのか？里菜は交通事故で死んだ。もう何年も前の話だ。最近では最愛の人の顔を忘れちゃいけないかと恐ろしく思ったものだ（いや、忘れてなるものか）では隣で寝ているのは誰だ？

突然妻が飛び起き、ピエロの人形みたいに自分に笑いかけてくるイメージが浮かんだ。顔は交通事故で半分が吹き飛んでいて口の端から口紅よりももっと赤い血が流れ出している。手足は折れ曲がり、晋太郎に体を預けるようにしてもたれ掛かると、上目遣いで言うのだ。

「あなたのせいじゃないのよ、私たちはマネキンみたいに吹き飛んで死んじゃったけれどね、ふふふっ」

その恐ろしさに晋太郎は眠る妻を見られずにいた。顔は青ざめて、下が喉へと張り付き、ギラギラした自分への憎悪が込み上げてくる。しかし震える晋太郎の耳に妻の安らかな吐息が聞こえてきた。晋太郎は目を見開いて妻に目をやる。眠る里菜は体をむず痒そうに擦って、少しだけ動くと、また同じように安らかな吐息を立てた。

晋太郎はもう一度汗を拭った。それから音を立てないようになるべくそつとベッドから降りると、洗面所へ行つた。足取りが軽い。もうしばらくの間忘れていた感覚だ。二度と自由に歩けはしないと思っていたのに。最初はぎこちなさそうに足を引きずったが、洗面所へ着く頃には晋太郎の歩きはベテランのそれだった。

「これは驚いた」晋太郎は大声を上げないように、押し殺して言うのと、洗面台に手をつけて長い息を吐いた。

鏡の中の自分とにらめっこをした。体が完治したただけではない。鏡の中の自分は六・七十に見えた灰色の自分ではなく、遙かに若返っていて、そこにいるのは三十前半の、一番生きる力があつた自分だった。捲り上げて腕を見ると点滴のやり過ぎで麻薬中毒者みたいになった注射針の痕がさっぱり消えてなくなっている。白髪交じりだった髪は黒々としていたし、目の下の中華料理の取り皿みたいなクマもなかった。晋太郎は顔を洗って、水と汗とで濡れた髪を後ろへと撫でつける。

晋太郎がまだ高校生のときの話だが、同級生の女の子に告白されたことがある。そのときはクリスマスのちょうど一ヶ月前で、その女の子はいかにも今すぐ彼氏が欲しそうだった（女の子のグループ

では彼氏がいることがステータスだった。ちょうど男子が何人とやったかを自慢しあったり、彼女のバストのサイズを自慢しあったりするように)。晋太郎は何も考えずオーケーして、晴れてカップルが成立した。そこで晋太郎は女の子との初めてを経験した。同級生の林秋房は、セックスは世界観を変える、と豪語していたが、晋太郎の世界は思ったよりも変わらなかった。結局それから年が明け二ヶ月ほど付き合ってみたが、最後にはお互いに興味がなくなり、自然消滅してしまった(彼女はいつの間にか新しい彼氏を作っていて、周りには自分はフリーだと言い張っていたらしい)。

そのとき同じ高校の二年後輩にいたのが妻の里菜だ。大学を卒業して就職してから知り合い、そして結婚へと至った。

今思い出せば奇妙なことだと晋太郎は考える。もしかしたら里菜は自分がその女と付き合っているとき、自分の姿を見ていたかも知れない。他の女と寝たことを自分は何とも思いもしなかったが、よく考えれば妻の目の前を、仲良く手を繋いでクリスマスへ向けて互いの心を最高潮に高めあおうとしていたことは奇妙なことだ。まあそのときは妻のことは何も知らなかった。

それら一切の光景を頭の中に巡らして、晋太郎は里菜と初めて寝た女の子、それに病室のベッドにあつた空のネームプレートを思い出していた。

「私たち永遠に愛し合えるよね」初めての女の子は言った。彼女は猫のような仕草で晋太郎の首に手を回している。

「まあね」晋太郎は素っ気なく答えた。

「意地悪なこと言うね」女の子は眉を細めて言った。それから手ほどいて付け加えた。「あまり怒らせないでね」

「まあね」晋太郎は少し微笑んで返した。

まあいいわ、とでも言うように視線をそらした女の子は少し考えたあと、晋太郎に向き直って言った。「私たちっていつか結婚するのかな？晋ちゃんとなら私はいいいよ」

晋太郎は呆れた顔をして彼女を見た。それから何も言わずに目を

瞑って、狸寝入りをして過ごした。彼女の目が真剣だったからだ。どうしてあんなことが言えるのか、信じられなくて、声を出して笑いたかったのを覚えている。

「ずっとあなたを愛してるからね」

似たような台詞を里菜にも言われた。晋太郎はうなずいて彼女を抱きしめ、同じように何も言わなかった。

ハラハラしてるか？んっ？そこで堪えるのがコツだ

今置かれている現状が、不可思議なことであろうとなかろうと、鏡の中に映った男は中々どうして、イカした面をしていた。自分が若返っていることは確かだ。入院中は出来なかったことも、きつと今はできるだろう。車の運転をして遠くまで行けるだろうし、好きなものを食べられる。だがどうしてこんな状況に置かれているのかは全く分からない。それを理解するのは、ひよっとしたら無理なのかも知れない。

晋太郎は洗面所の磨りガラスの窓を見た。外が僅かに白んできており、静かな朝を告げている。もう一度辺りを見渡した。脱衣カゴの中にまだ洗濯されていない衣類が押し込まれている。そこで晋太郎はどきつとした。鼓動が早くなって、またあの苦しみの発作がやってくるのではないかと心配になった（同時にそれが来ないことも知っていた。何せ自分は若返っているのだから）。

心臓を早めた原因となったのは、脱衣カゴから垂れ下がった小さなＴシャツによるものだった。胸の所にデイズニー映画のトイ・ストーリーのキャラクター、バズ・ライトイヤーがプリントされた紺色のＴシャツは、息子の晋輔のものだ。

「そんな、どうか・・・」晋太郎は震えながら言った。

今や自分は体が若返り、死んだ妻と息子が戻って来るという奇跡を体験している。

「夢ならば、どうか、神様・・・」

外では朝の静けさの中、小鳥たちがフルートをかき鳴らすことで、

その様子を一層荘厳なものに変えていた。

現実を背いて、それが信じられるかどうか何てことは必要なことじゃない。それだけの生氣と力が晋太郎には備わっていた。

晋太郎は寢室へと戻り妻の里菜の眠るベッドを、何も言わずに眺めていた。戸口に手を当てて恐ろしく長い時間そこに立ったまま見ていたような気がする。感情は不安と安堵が奇妙なバランスで入り交じったもので、濃い紺青色をしていた。晋太郎はベッドへ戻ると里菜を抱きしめて、少しだけ泣いてから、もう一度眠った。

その四

目が覚めることを晋太郎は恐れていた。昨日のあの夢が終わってしまっていて、隣に目を移せば、またあの真白なシーツのベッドがあるのではないかと思つたのだ。覚悟はあつたがそれでも恐ろしいものだつた。どうして何度も家族を失う苦しみを与えられなければならぬのだ？という感情があつたからだ。

布団の中に手を伸ばすと隣には誰もいなかった。しかしまだ暖かかつたし、布団にシャンプーの香りが残っている。晋太郎は体を起こして窓へと歩み寄り、開かれたカーテンから差し込む光に身を投じた。

「やっぱり、ここは俺の家だ」晋太郎はぼつりと言つて、それから息を飲んだ。確かに自分の家だ。入院してから一度も帰っていない家。看護師の田中に頼んで家の整理などはしてもらつていたが、二人の遺影は持つてきてもらわなかつた。死んだ二人を横に眠ることは、そんな勇氣は持ち合わせていなかつたからだ。

窓を開けてから一階へ下りていくと、リビングから香ばしくて香しい香りが漂つてきた。

「あら、今日は早いのね」

カウンターキッチンの向こう側とテーブルとを行ったり来たりしながら、里菜は料理の最中だつた。晋太郎は信じられないという呆然とした顔で眺め、自失した状態で里菜の手元をじつと見ているばかりだつた。そんな彼を引き戻したのは里菜の疑るような笑いと、その声だつた。

「どうしたの？今日は休みでしょ？そんなところに立つたままで」

里菜はそう言うと、チキンナゲットをひよいとつまんで口の中へ放り込んだ。「寝ぼけてるのね、きつと」

晋太郎は罰の悪そうな顔を横に振った。

「煙草は？吸わないの？」と里菜。

「煙草？俺が吸うのかい？」晋太郎は真剣に言った。

里菜は手を止め、一体何を言ってるの？と言わんばかりの目を晋太郎に向けた。それから手に持ったスプーンとマスタードソースの入ったピンをテーブルに置いて言った。「晋ちゃんが起きてくる前に外に吸いに行くのがあなたの日課でしょ？子供の前では吸わないつて。それからとびつきりに濃いコーヒーを飲むんじゃないの？」

「そうだったな・・・でも煙草はもう二十年以上も前に止めたよ」

少し考えて晋太郎は答えた。

「本当に？」里菜は笑いながら言った。「私の記憶が正しかったら夕べ吸いに出かけるあなたを見たけれど・・・あれはきつと夜風に当たりに出かけたのね？」

「いや、ごめん。煙草は昨日でやめだよ。もう吸わない」晋太郎は微笑んで言った。

「止められるの？」

「簡単さ・・・何度でも止めればいい」

「そうね」

言い終わって二人して声を上げて笑った。

晋太郎は平静を装ってリビングへ入ると、ソファアにどしんと腰を降ろした。それからテーブルの上の新聞を手に取り一面を広げた。表紙では、首相の電撃交代がありそうだ、という記事と、新型のウイルスが世界中に蔓延している、という記事の二つが、その覇権を争っているばかりだったが、晋太郎はそれ自体が面白かった。結局首相は替わらなかつたし、新型のウイルスの話はいつの間にか聞かなくなり、気付いた頃には翌年の花粉症の季節だった。どちらももう二十年以上前の話だ。晋太郎は新聞の上で視線をウロウロさせていることに気がついた。日付は二十二年前の五月十七日となってい

る。それは忘れもしない憎むべき数字だった。愛する二人の家族が奪い去られた、その日だったのだ。

「ああ、何てことだ・・・」晋太郎は目を見開いて口に手をあてがった。

もう一度新聞の日付を見て、それから記憶の中にある家族が死んだ記憶を思い起こしてみる。

五月十七日

間違いない。里菜と晋輔が死んだのは今日この日だ。

突然置き電話の横にある携帯電話が鳴り出した。里菜はどうということもなしに一瞥をくれてよこしたが、晋太郎は驚きのあまり悲鳴を上げそうになった。だが悲鳴はぎりぎりのところで飲み込んだので、聞こえてはこなかった。

「電話よ、あなたの携帯ね」里菜が声を掛ける。

しかし晋太郎は動かなかった。代わりに時計に目をやると、時間は午前六時三十分を少し回ったところを指している。「この電話は」と心の中で呟いてゆっくりと立ち上がった。それから電話へ歩み寄って手に取る。折りたたみの携帯を開くとそこには「株式会社スタッフ」と映し出されている。この電話の内容を知っている。派遣のスタッフが一人仕事場へ行っていないくて、代わりをよこせというものだ。晋太郎は携帯電話をゆっくりと閉じた。だがまだ鳴り続けている。もし電話に出れば自分は仕事へ向かい、そして愛する家族を再び殺してしまうことになるのだろう。

携帯電話を手にしたままソファへ戻ると、晋太郎は電話を両手で包んで、両膝の間に頭を落としながら祈った。今や呼吸が荒くなくなって、発作が始まってもおかしくはなさそうだった。体中が暑くなり汗が噴き出した。脳が心臓に取って代わったように頭の中で鼓動が聞こえだし、ふと音が遠のいた。このまま意識を失ってしまえば一体どれだけ楽になれるだろうか、と考えたが、意識は逆にはつきりとしている。

誰もがヘロインという薬を知っていると思う。言わずもがな麻薬

の一つで、静脈に打てば究極の快感であるラツシユがやってくる。

人間の経験しうる全ての快感の中で勝るものはなく、最高の状態なのだという。全身から射精をするようなその快感は、約束された安堵などとも呼ばれる。その麻薬と治療に使われる鎮痛剤モルヒネが、原料を辿れば同じものだとは知っているだろうか。晋太郎はそのモルヒネを、体中を走る疼痛を防ぐために長い間投与し続けてきた。打てば体の痛みは取れ、楽になり、苦しみから解放される。

晋太郎は今まさに苦しみが絶頂に達しようとしていることを理解していた。しかしモルヒネで逃げようなどとは思わなかった。モルヒネはギリシア神話の夢の神様モルペウスがその由来だが、夢の中へ逃げ混んでしまおうとは思わなかった。

いや・・・今置かれている奇妙な現実こそが夢なのかも知れない。電話に出てはいけない、出てはいけない、出てはいけない、出ては・・・（これは夢なんだ・・・言葉が、全てが現実じみてる。だからこそ、もしかしたらそうなのかも。だが、もしも夢ならわざわざ目覚める必要などないではないか。目が覚めて、窓から逃げたそうとしている二人の死の記憶を捕まえているよりも、夢の中の方がずっといい。二人を死なせた原因は自分であると胸に刻んだのだ。その二人をもう一度救えるのであれば、その機会があるのならこのままでもきつといいはずだ）

しばらくすると気分がゆっくりと治まってきた。呼吸が正常に戻り、鳴り続けていた電話が鳴りやむ。晋太郎は里菜を見上げた。里菜は驚いたように晋太郎を見ていたが、すぐにほっとして肩の力を抜いた。里菜の耳元で星形の小さなピアスが光っていた。

「仕事の電話じゃなかったの？」と里菜。

「いや・・・いいんだ」晋太郎は伏し目がちに言った。「それよりも今日はみんなで遊園地に行く日じゃあなかったっけ？」

「ええそうよ。晋ちゃんは楽しみにしててね、昨日は十一時まで起きてたんだから」里菜は嬉しそうに言った。「寝れないんだって」

新聞の上に携帯電話を置いて里菜のいるキッチンへ二・三步近づ

きながら、そこでテレビの隣に置いてある、水をやらなくても二・三年は枯れないという花が目に入った。薄いピンクと水色をしたラムネ菓子のような花は向こうの世界ではもう枯れてしまったやつだ。里菜がコーヒーを手早く入れ、差し出すようにテーブルの端へ置いた。深くて香ばしい香りが立ち上り、表面が幾らか揺れている。「あなた？」里菜の声は少し笑っている。「仕事を置いておくなんて、どうしちゃったの？」

「どうしてって、当然のことだよ。晋輔との約束が優先だ」

「そうね」

「二ヶ月も待たせたんだ」晋太郎はミニトマトを一つ食べた。甘くて美味しかった。

香りだけを吸い込みながらカップを口に付けると、ゆっくりとコーヒーを飲んだ。里菜は隣でサラダとドレッシングとを器用に混ぜている。晋太郎はぐるりとテーブル上の料理に目を走らせ、豪華だ、と言った。

時計が七時を回ると、晋太郎は最早この現状に疑問すら持っていない気分でテレビを見ていた。十年も前に終わった朝のニュース番組には今は亡きキャスターや、不倫騒動などで消えてしまった女子アナも映っている。それに何年前かに自殺した芸能人がこれでもかと言わんばかりの笑顔で笑っているのを見ると、妙な気分になると同時に笑い出したい滑稽なものに見えた（その笑顔がB級映画や三文芝居で見られるようなブラックジョークでしかないのだ）。

里菜は料理をあらかた終えて片付けにかかっていた。しきりに時間気を気にしている様子だったが、まだ余裕があるのか何やら歌を歌っている。

リビングのドアが音を立てて開いたとき、晋太郎はソファアにたふぷりともたれてくつろいでいた。開いたドアへ顔を向ける際、途中で時計を見ると、七時五分ちょうどを確認する。そして晋太郎はドアから現れたものを見て、背筋がピンと伸び、足の先から何かが這い登ってきて、それが熱を帯びたものとなって顔中から吹き出す

ような感覚に襲われた。上手く言葉が出なかった。

ドアの向こうから現れたのは、鼠色で腹にブルドッグの刺繍の入ったパジャマを着た晋輔だった。少し茶けた髪はうねっていて、頭の先にピンと寝癖を立てている少年は、眠たそうに目を半分だけ開いて、片手はドアを、もう片方は力なくだらんと下げている。

寝起きの少年はリビングを見渡し、キッチンの方から香ってくる料理のにおいに鼻をくんくんとくゆらせたあと、ドアを閉めた。晋輔はまだ眠たそうに欠伸をして見せたが、ソファーにいる父親の姿を見ると、その目を全開にして見開き、足早に父親にしがみついた。夢の中にいた晋輔は父親の姿を見ることで現実に戻り、同時に今日この日、待ちに待った遊園地へ行けるという事実を再確認したようであった。

「お父さん、おはよう」晋輔は言った。

自分の体をよじ登るようにして目を輝かせる晋輔の前に、中々次の言葉が出てこない。それよりも晋輔のことをもつと見ていたかった。晋太郎は晋輔を抱き上げると膝の上へ座らせて顔を覗き込み、それから震える声で言った。

「もつと顔を見せてくれ、キャプテン。クルーにその顔を」

晋輔は怪訝そうな目で父親を見やった。それから脱出するように父親から逃れると、前に立ち、まだ袖口を掴んで離さない父親に向かって言った。

「ネモ船長の話はこの間終わったよ。今日は遊園地に行くんだ。そうでしょ？」

「ああ、そうだ」晋太郎は言った。

晋太郎は晋輔を側へ寄せて両手で顔を捕まえると、その目や鼻、口、眉毛、顎、至るところをまじまじと見た。晋輔は勘弁した様子でされるがままになって体を左右に振っていた。

「何、あなた息子の顔を忘れちゃったみたいね」キッチンからやって来た里菜は言った。

「そんなことはないさ」晋太郎は首を振った。「忘れたくないよ。」

「一番近くで見てやる」

やめてよ、と言いかけて晋輔は口を閉じた。

「二人とも先に顔を洗ってきてね。それから服を着替えちゃってね」
晋太郎と晋輔は一度顔を見合わせると、競争をするように洗面所へと急いだ。晋輔は小さな子供特有の甲高い声を上げて喜び、晋太郎は追いかけるようにして笑った。

服を着替えるときにはパジャマを丸め、バスケのシュートをするように脱衣カゴに放り込んだ。晋輔も同じようにして、三回目にしてようやく入った。二人して並んで歯を磨いたときには、どちらが先に終わるかで短い議論があつたが、磨きはじめは晋輔の方が早かつたという理由で晋太郎は先を譲った。二人ともトーストに目玉焼きを乗せて食べた。同じ量の砂糖を入れて紅茶を飲んだ。遙か昔の懐かしい全てのことが、どれも新鮮に思える。遠い昔に忘れてしまったことを、晋太郎は人生で今初めてやっているのだった。

ふと自分の顔がにやつていることに気がついたが、晋太郎はその顔を隠さないことにした。

「何？どうしたの？笑っちゃって」ティーカップを口に付けながらりながら問いかけた。

「いや、どうもしないさ」晋太郎は答えた。

その様子を、晋輔はソファに座り、普段はテレビの横に飾つてあるフェラーリのミニカーをいじくりながら見ている。父親を囲む空気を見ながらにやにや笑いを送りつけている。晋太郎が視線に気づいて息子を見ると、晋輔は、とつても楽しいんだね、と笑った。

食後に談笑している妻と息子をのこして車を準備しようと外へ出ると、向かいの家の奥さんがにやかな会釈をよこした。奥さんは玄関の掃き掃除をしていて、全て一まとめにされた長い髪が色つぱく肩にかかっている。

三軒向こうの佐藤家のおじいさんが外へ出ていて、自分の家を見上げて何やらぶつぶつと言っている。右手の指で組んだ左手をトン

トンと叩き、少しイライラした様子で自分の家を睨みつけている。

道路を年代物のホンダ・シビックが走っていった。朱色の古いシビックには不釣り合いなほど若い男が乗っていて、晋太郎のことを、まるで女性が男性を値踏みするかのような油断ならない目で見ていった。シビックは次のカーブで止まると、ゆっくり左折して消えた。

こういうのは絵になるな、と思いながら晋太郎はガレージに入った。晋太郎はワゴンRに手を添えながら、もう少し大きな車だったら二人は死ななかつたかも知れない、と思った。そして自分の残酷な妄想に嫌悪する。自分の口から傷ついたようなため息が漏れたことに驚いて、口をつぐんだ。

道路の向こう側では向かいの奥さんがようやく掃除を終えて中へ入っていくところだった。佐藤老人の元へはその奥さんが参戦しており、今や佐藤夫妻となった二人は難しい表情を浮かべながらそろって家を見上げている。さては何か悪戯されたんだな、と晋太郎は考えたが、後にそれは間違っていると知った。二回の屋根の縁の下に鳥が巣を作っていたらしいのだ。奥さんはそれが屋根を汚すからという理由で旦那にすぐ壊すよう迫っていて、その巣は二日後に撤去された。

雲は少し出ていたが雨が降るような心配は感じられなかった。時折強い風が吹いて、何かをなじるようにウーウーと喚いた。晋太郎が家へ入ったときには里菜は出来上がった弁当を包んでいて、傍らで覗き込んでいる晋輔の頭を撫でていた。

「車、どこが悪いの？」里菜は言った。

「いや大丈夫」晋太郎はさらっと答えた。「ガソリンも満タンさ」

「私お化粧するわね」

「ああ、晋輔と遊びながら待ってるよ」

里菜が去るのを確認すると、晋輔は父親の元へ這い寄り、聞き取れないほどの小さな声で言った。「ねえ早く行かない？」

晋太郎はテーブルの上のお茶を一口飲んでから、しゃがんで晋輔の目をまじまじと見た。その目は興奮と期待がにじみ出っていて、見

間違いでなければキラキラと雪の結晶のように輝いていた。晋太郎は晋輔を抱き上げて「早く行こうな、すぐにでも」と言った。

その五

家族は十時前には三人ともワゴンRへ乗り込んで、遊園地へと向かった。車内では最初ビートルズの「ヘイ・ジュード」が流れていたが、晋輔の希望でS M A PのCDと変えた。晋輔は後部座席で窓を半分ほど開け、ドライブ中ずっと歌を歌い続けている。

たいしたもんだ。このまま無事に成長したら大物歌手にだって、何にだってなれる。きつと、何にだって、望むものに。

そのためになら俺はどんなことだって・・・

実際本気の構えだった。

一生を賭してやる仕事だ。

「ねえ一番速いのはどれ？一番スリルがあって速いやつだよ！」

遊園地に着くなり晋輔は二人の手を馬みたいにぐいぐい引いて、忙しくはしゃぎまわった。晋太郎と里菜は苦笑いを浮かべながら晋輔をなだめた。ジェットコースターに三回連続で乗った頃には晋輔は、ゆっくりしたのに乗りたい、と言うようになっていた（里菜は一回目以降の旅をパスした）。

それから遊園地の中に設置されたパラソルの下で早めの昼食をとった。晋輔が勢いよく卵焼きやおにぎりを頬張るのを、晋太郎はジンジャーエールを飲みながらたつぷり眺めた。食事のあと三人はボートに乗って水の中を突き進む乗り物や、手元のレバーを引くと上とする飛行機の乗り物、観覧車へも乗った。

「どうしてこんなにゆっくりなの？」観覧車が最も高いところへ達した辺りで、晋輔は静かに言った。

「靴を脱いで座席へ上がったら、ほら、外を覗いてみな」晋太郎は

答えた。

晋輔は乗り出して下を見ると、目を見開いて座席横のバーをきつく握った。人や木々がレゴブロックの人形のように小さく見える。「ここが遊園地の中で一番高いところだ。多分九十か百メートルくらいはあるんじゃないかな。ほら顔を上げて遠くを見て。あっちの方角に家があるんだ。太陽も同じ方角から昇ってくる。向こうの方の街がだな、見て、空とくっついて見えるだろう？地球が丸いってことの証明だよ。観覧車がゆっくりなのは、こうやって景色をのんびりと眺めるためさ」

「もし速かったら何も見れないものね。すぐに終わっちゃう」里菜が挟んだ。

「ああ、そういうこと」晋太郎は同意した。

「僕はもう少しスリルがあった方がいいな」晋輔は未だバーを握りしめたまま遠くを見ている。「でも景色は綺麗だね」

「私は好きよ」

晋太郎はうなずいた。それから晋輔の隣ににじり寄って、晋輔の肩を掴むと同じように遠くを眺めた。遠くが白んでいて世界に順番に夜がやってくると、そう考えると何だか変な気持ちになった。

里菜と晋輔はメリーゴーラウンドに乗った。晋太郎は乗らなかつた。さも幸せな家族の群像のように、二人が乗るのを周りを囲む鉄柵に寄りかかりながら見守った。晋輔は緑色の鞍の少し黄ばんだ毛色をした馬を選んだ。里菜はすぐ後ろの馬を選んだ。馬たちの目は異様なほどにリアルに出来ていて、競走馬のように血走って見える。回転木馬はゆったりと優雅に、オルゴールの音色に乗せて走った。

笑う二人に手を振り、二人はまた去っていく。ふいにこの二人に形容しがたい思いが込み上げてきた。熱くてとても澄んだ、この二人に対する愛情が込み上げてきて晋太郎を包み込み・・・次いで二人が死んでしまったもう一つの現実が浮かんだ。

名を付けがたい恐怖が晋太郎に覆い被さる。鈍い、トタン板を無理矢理引っぺがしたような鉄の音が頭の中を駆け巡った。瞼が痙攣

を起こし、意識の中に恐怖が水溜まりのように溜まって反射しているように思われた。

数歩後じさりした彼は周りを見渡すと、一目散にトイレへ駆け込んだ。蛇口の水を一杯出して顔を勢いよく洗う。喉の奥に絡んだタンを吐き出して、長い間一度も呼吸をしていなかったかのように思い切り息を吸い込んだ。顔を上げて晋太郎は青ざめた。鏡を覗き込むとそこには自分が映っているのだ。しかしそれは活力みなぎる自分ではなく、病室のベッドで廃人と化し、死をただひたすらに待つ自分だった。白い髪は乱れて、痩せこけ、頬にあてた指先の爪は黄ばんでひび割れている。

反射的に恐怖の悲鳴を上げて体をびくんと強ばらせた晋太郎は、酸素をなくしつつある自分の肺に、どうにか酸素を流し入れようと必死だった。はつと気配を感じて振り返ると、そこに鏡の中の自分が立っていた（後々に晋太郎は考えたが、こうして自分自身に出会うというのは、過去のビデオテープを引っ張り出してきて見たとき、テレビの中の自分と予期せぬ所で目があって、ニヤリと笑われるのに似ているのではないだろうか）。

晋太郎は絶叫しながら振り払った。その声は怒りから来たもので、晋太郎は自分を睨みつけると、その姿に突進した。しかし晋太郎は雲に突っ込むかのようにすり抜けて、態勢を崩し、トイレの壁に激突するとその場に倒れた。右肩が痺れ、足が疼く。もう一人の自分はゆっくりと近づいてきて目の前で座り込んだ。そして彼の眼の中を覗くと、無表情のまま、両手でシャツの襟を掴んだ。

「人はみな後悔することを恐れる」男は言った。
晋太郎は身を振りながら首を振った。男の手をふりほどこうとしたが、恐ろしいほどの力が加わっていてほどくことが出来ない。しかも男の手は氷のように冷たかった。氷に皮膚を被せただけのような・・・もしくは、まるで、そう、死人のようだ。

「何が悪い・・・」晋太郎は絞り出すように言った。

だが男は何も言わず、感情のない顔で見ている。

「公平じゃない」晋太郎は声を荒げた。「二人は、里菜も晋輔も何も悪くなかったんだ。あの二人は死ぬ理由なんてなかった。俺は二人を愛しているんだ。その二人が今、生き返って、あんなに幸せそうに笑っているのに、それが続くことを望んで何が悪い」

彼は今や泣き出ししていた。顔をクシャクシャに歪め、肩を震わせて泣いた。

「人はみな後悔することを恐れる」男は全く同じ調子で同じことを言った。

「頼むから、家族を連れ去らないでくれ、俺は死ぬまでの全て……一切を……二人に、二人に捧げる、きつと。だから、二人にどうか幸せな人生を、あんなに短いものじゃなくて……どうか……神様……」

声がトイレの中に響いていた。涙と嗚咽で聞き取ることさえ困難な叫びを上げて晋太郎は泣いて懇願した。唐突に二人の笑顔が頭の中に浮かんで、春の風のように突き抜けた。すると目の前の男は突然消えていなくなった。晋太郎はうな垂れて膝の間に頭を落とした。そして視線を足下に落ち着かせ、次第に正常になるまで、しばらくそこに座っていた。

トイレから戻ると、二人はメリーゴーランドの横のベンチに座っていた。晋輔が声を上げて父親を指さし、里菜は心配そうな顔をしながら、晋太郎に駆けよった。平静を装いながら、晋太郎は里奈の目が潤んでいることをいち早く察知した。優しく肩を抱いて謝ると、肩をさすりながら晋輔のいるベンチへ戻った。

「どこに行ってたのさ」晋輔は見上げて言った。手にしたソフトクリームが溶けかかっている、表面を滴が光りながら流れている。

「ごめんごめん、急に腹が痛くなってな、トイレに走っていったんだ」晋太郎は息子の頭をクシャクシャに撫でた。「早く食べないと、それ、溶けてしまうぞ」

「うん」晋輔は笑顔でそう言い、ソフトクリームを食べた。晋太郎も一口食べ、里菜も一口食べた。

ベンチに二人を座らせて、晋太郎はその前にひざまずいた。まるで罪人が神に懺悔するように。二人はきよとんとした顔で晋太郎を見つめ、彼は一拍おいたあと、顔を上げてその目を見つめた。

「よく聞いて欲しい」晋太郎は始めた。彼は思ったのだ。これまでもう一つの時間の中で彼がしてきたことを洗い清めることが出来るのではないかと。およそもっとよい方法があるのかも知れないが、彼にとっては精一杯の懺悔と決意の方法だったのだ。「可笑しいと思うかも知れないし、本気にはしないかも知れない。何しろこれは俺が体験してきたことだから、きつと、二人には辛いことかも知れない。だから……」

「ええ、いいわ、話して」里菜は晋太郎の手を取って言った。「大丈夫だから」

晋太郎は里菜にうなずくと、息子の目を見た。少しだけ怯えているが強い目だった。それを見て彼は安心した。

「もう一つ、今とは違う未来があった。時間があった。その世界では……二人は、死んでいる。もう二十二年も前のことだ。トラックとの……その、交通事故で、今日、この日に死んだんだ」

視線を落とした。二人の顔が正面から見られなかったからだ。だがしかし、彼は持ち直して話を続けることが出来た。里菜が晋太郎の手を強く握ってくれたからだ。晋輔も手を取って強く握りしめた。「二人は死んだ。その記憶は俺の中に鮮明に残っている。忘れることなんて出来ないし、どれだけ昔のことだとしても、過去を忘れるなんて無意味だ。お前たちは、俺のせいで死んでしまったんだ。俺が殺したも同然なんだ。ずっと謝りたいと思っていた」晋太郎はすつと涙を流して震えながら言った。多分息子の前で泣いたのはこれが初めてだろう、と慎太郎は思った。しかも最後になるだろう。

「謝る必要なんてないよ」晋輔が恐る恐る言った。眉根を下げて心配そうに父親を見ている。

「そう、謝る必要なんてないわ」里菜が続いた。「それって、多分、あなたの責任じゃあないもの。ええ、何となくだけど、分かるわ。」

それに私たち死んでないのよ。こんなに元気で、今日なんてとっても楽しかったわ。そうでしょ、晋ちゃん」

晋輔は笑顔でうなずいた。

居ても立ってもいられず、晋太郎は二人に抱きついた。そして一際声を上げて泣いた。通り過ぎる人が幾人か、嫌悪する目で見て去っていったが、三人とも誰も何も思わなかった。

「きつと悪い夢でも見たのよ、きつと」里菜が聞き取れないほどの声で囁いた。声は遊園地内を流れる楽しい鼓笛隊の音楽に乗って、さつと空へ消えてなくなった。

「生きるってというのが空白みたいなことにならないように、幾つもサンプルがあつてそれを選んででも目標を持てたらっていう、変なやつがあつたら面白いなあ」

何年も前に、もう一つの世界の担当看護師の田中はそう言った。

毎日、晋太郎は眠る前にその言葉を思い出してから眠る。儀式やおまじない、願掛けの類に過ぎないが、そうすることで目が覚めたとき、二人を愛するという決意が漲り、自分という人間を賭けるだけの大いなる目標が持てる。

晋太郎にとつては一日を終えて眠る前の時間、その毎日が恐怖との戦いだった。もしかしたら全てが夢で、目が覚めるとそこはまた病院のベッドの上なのかも知れない。しかし目が覚めればそこには最愛の家族、里菜と晋輔がいた。

五十四歳で癌のために早い死を迎えるまで晋太郎は家族を想い、守り続けた。

四十六のとき、晋輔の七歳の誕生日に飼い始めた柴犬のラインが息を引き取った。まだ十歳だったが病気だった。晋輔は「生まれ変わったらまたどこかで会おうね」と涙して、庭のプラタナスの木の下に墓を作った。

四十九のとき、晋輔は恋人を晋太郎に紹介した。敬子という名前前で、看護師を目指している二十歳の女性だった。医者を目指してい

る晋輔は、研修中に知り合ったこと、いつかは結婚を考えていること、子供の名前を決めて欲しいということなど、ビールグラスを交わしながら嬉しそうに言った。

五十二のとき、晋太郎は人間ドッグで早期の癌を見つけた。それを告げると里菜は悔しそうに泣いた。その後、医者のお惑とはそれて癌は体中へ転移し、肺を七割も摘出したが十分ではなかった。

早い内に晋輔は父親の死を悟っていた。職業柄仕方のないことだった。里菜は晋太郎に、「奇跡を信じるよりも精一杯生きましよう」そう涙を浮かべて話しかけ、最後の瞬間まで看病を続けた。

五十四歳の春、百瀬晋太郎は家族と大勢の人たちに看取られながら息を引き取った。

少しだけ開いた窓から吹き込む風は暖かく爽やかなものだった。太陽が何よりも高く昇って、全てのものを光で照らしている。

死の間際、見えなくなつた目で家族の姿を追いかけながら晋太郎は思った。過去は必ず付きまとう亡霊だが、進むためにはそいつと付き合っていかなければならない。だが夢を見ることは消して悪いことじゃあない。その素晴らしい想像は希望へと繋がっているかも知れないし、それこそが救いなのだ。彼は叫んだ。最後まで、その瞬間まで。

その六

中畑敬子と間宮章子の二人が病室へ着くと、すでに医師の泉はベッドの横に立っていて、一歩下がったところに田中がいた。田中は小さな声で二人に指示を出し、章子は手早く指示された薬を用意し

て、敬子は点滴を変えにかかった。百瀬晋太郎は酸素マスクをしたまま動かず、目を瞑ってただただ眠っていた。まるで糸を切られた操り人形のように横たわっている。糸を切られ自由を手に入れ、死の記憶の付きまとう人生から解放されたかのように。少しだけ笑っているようにも見えた。きつといい夢を見ているのだろう。

百瀬晋太郎はそれから命が尽きるまでの間の四日間、一度も目を開けることはなかった。だが一度も苦しんでいる様子もなかった。泉はこれ以上の延命措置が意味をなさないものだと思いを振った。田中は、残念だ、と頻りに漏らしており、最後の最後まで晋太郎に話しかけていた。

彼の五十四年間の最後は実に静かだった。亡くなったのは午後二時の一息暑い時間だったが、吹く風は涼しくて、木々はサラサラと歌った。

「やっぱりあの瞬間に立ち会っちゃったわね」トイレで髪を結い直しながら章子は言った。「でも私、今度のはそんなにひどくなかったわね。どうしてだろう」

「私もです。百瀬さんが亡くなったっていうのに不謹慎かも知れないけれど、でも百瀬さん、幸せそうだったってどうか。そう見えませんでした？」敬子は衝動的に、誰もが同じ思いをしているのだと悟った。

「私には分からないけれどね」章子はきっぱり言った。

敬子は同意した。

「でも死ぬ間際なんだから、向こうで家族に会えたんじゃない？」

「そうだといいですね」

「それよりさ、あなた今晚どう？」章子が囁いた。「あなたも男作らないと駄目よ」

「はい……でも私今晚は当直なんです」敬子は答えた。

「あら、そうなの、残念ね」章子は弱い調子で言った。

その後病室のベッドのシーツを変えながら、中畑敬子は百瀬晋太郎のことを考えてみた。この部屋にもすぐにまた新しい患者さんが

入る。でも少し前までは百瀬晋太郎という一人の男が生きていた。私は家族の代わりになればはしないが、孤独のままではなく、最期を見届ける一人の人間になれただろうか。また少しだけ泣きたくなつたが、敬子はそれを飲み込んだ。

不意に強い風がボーボーと音を立てて吹いた。まるで大きな梟の鳴き声のようだ。敬子は少しだけの幸せが彼にも訪れたことを祈つて、病室の窓を閉めた。

その五（後書き）

「ある男の二十二年」終了です。

誰もが日々、もしもああだったらいいな、だとか、こうしたいな、など様々な願望を持って生活しています。

晋太郎にとってそれは家族と過ごす時間だったのでしょう。それが夢になって・・・いや、彼が死の間際に過ごした二十二年間、もしかしたらあちらの方が本物の時間だったのかも知れませんか。

間違つて六話を削除してしまったので、五話を改正して、その下に再度六話を入れさせていただきました。読みにくくなつてすみません。

感想を聞かせてもらえたら嬉しいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4228i/>

ある男の二十二年

2010年10月8日15時26分発行